



No. 3 1

平成27年3月20日(金)

発行 多治見市教育研究所

URL <http://school.city.tajimi.lg.jp/kyoiku/>

本誌は、多治見市教育研究所ホームページ上でもご覧いただけます。

巻頭言

学ぶことと 与えること

多治見市教育委員会 委員長 小林 甲一

私たちは、特に教育のことを想うとき、「人間とは何か」について考えさせられます。ドイツの人間学的哲学者ゲーレン (A. Gehlen) は、「人間は、本来、自足性の欠如した『欠陥存在』である」と言いました。つまり、人間は、この世で最も豊かな存在ですが、だからこそ自分だけでは生きてゆけず、多くの物や人のお世話にならねばなりません。そのために、人間は、まわりの人や物に日々積極的に働きかけて生活し、さらによりよく生きようと努めます。これは、人間にとって希望ですが、宿命でもあります。そして、ゲーレンは、これをもって人間を最も未完成で生まれ、しかも未完成のままで終わる「未完の生物」と呼びます。つまり、人間は、自らを造り上げていくように造られた存在であり、人は、「もっと人間に」なれるよう生涯をかけて自らを形成していかねばならないのです。

では、そのために何をすればよいのでしょうか。困難なようで、シンプルでよいことが2つあると、私は、学生時代の恩師から教わりました。1つは、「学ぶこと」です。それは、ただ本を読むといったことよりも広い意味のものです。そのために、まずは自分の外だけではなく内にも目を開いていなければなりません。次に、耳を傾けること、つまり人の言うことをよく聞くことです。そして、つとめて物事にこだわらないこと、あまり執着しすぎないことが大切です。そうすれば、人は学び続けることができるはずです。

もう1つは、「与えること」です。モノやカネもいいですが、本当に与えるべきは、やはり笑顔、温かい言葉、感謝の気持ち、自分の能力です。これらは、すべて思いやりから生まれるもので、与える



ことはそれを形にしたものでしょう。「情けは人のためならず」と言いますが、人は、思いやり、与えることで自らをさらに高め、自分の生をより豊かにできると解することも可能です。よくギブ・アンド・テイクと言いますが、ギブ・ギブ・ギブ・・・、最初に与えることがあり、与え続けてこそ何か生まれるのかもしれませんが。

自分の人生を振り返れば、人がこれら2つを身につけるうえで、私たちが子どもたちを預かっている成長期がもっとも大切であることにすぐ気づきます。これらを詰め込む人の器は、小学生や中学生の時代に成形されるのではないのでしょうか。また、これら2つは、どちらも必ず相手がい、双方向と相互作用のなかで培われるものです。ですから、学校のなかでお互いに学び合い、与え合わなければ、子どもたちの「学ぶこと」と「与えること」を育むことはできません。私たちも、「未完の生物」たる人間として、子どもたちとともに学び続け、与え続けていきたいと思います。

東濃地区教育推進協議会 教育実践論文 【一般の部】優良賞（岐大論文出品）
 多治見市教育実践論文 【一般の部】最優秀賞

よりよい動きを求めて運動に取り組む児童・生徒の育成

平和中学校 古川 浩行

1. 主題設定の理由

状況がめまぐるしく変化し、常に瞬時の判断を求められるゲーム・ボール運動・球技では、自分がどう動いてよいのか分からず、目でボールを追うだけで何もできないでいる児童・生徒の姿をよく見る。運動の苦手な児童・生徒は「できないから嫌い、嫌いだからやらない。」という悪循環が存在するように思う。この悪循環を断ち切り、「できたら楽しい、楽しいからやろう。」という循環に変えることが必要だと考えている。

私は、ゲームの中で、児童・生徒に「できる喜び」をたくさん感じさせることで自信を生み出し、運動の楽しさを味わわせることで、主体的に運動に取り組む子を育てていきたい（図1）と願い、研究主題を「よりよい動きを求めて運動に取り組む児童・生徒の育成」と設定し、小・中になわって実践を試みることにした。

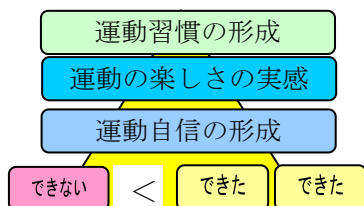


図1
研究主題に関わる
基本的な考え方の
イメージ

2. 研究仮説

ゲーム・ボール運動・球技において、ゲーム記録を活用した評価活動によって動きを修正・改善し、質的な動きの高まりを実感することを、9年間を通して段階的に行うことでできれば、児童・生徒は、より質の高い動きを求めて運動に取り組むようになる。

3. 研究内容

自ら課題を解決し、動きの高まりを実感できる評価活動の在り方

- (1) ゲーム記録の活用
- (2) 仲間からのアドバイス

4. 研究実践

- (1) ゲーム記録の活用

小学校4年生（ポートボール）

ポートボールの中核となる動きであるシュートの数について単元を通して追求し（図2）、動きの量的な高まりを目で見えるようにした。シュート数

が増えているということは、シュートに至るまでの有効なパスが増えているととらえることができる。

そこで、前半のゲームの記録から、どのようにパスをつなげばシュートに結び付くかをチームで考え、一人一人の動きを確認して、後半ゲームの作戦に生かせるように指導した。

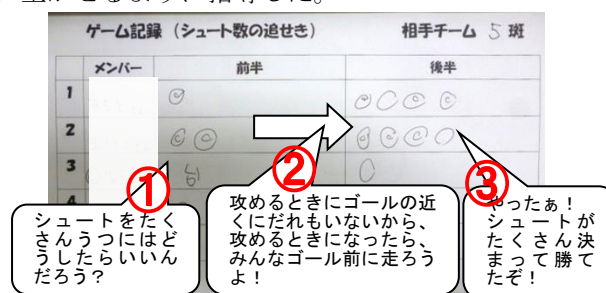


図2 ゲーム記録活用のイメージ

ゲーム記録（図2）を用いて自分の動きを振り返ることができ、表1のように、前半ゲームよりも後半ゲームの方が、動きが高まった。また、量的な変化を根拠に、仲間と評価活動を行うことで、動きに自信がもてるようになり、全員がシュートをうつゲームができるようになった。

	前半	後半	増減
シュート数（本）	980	1080	10%増
ゴール数（点）	641	743	16%増
ゴール成功率（%）	65	69	4%増

表1 前半ゲームと後半ゲームの変化（全チーム合計）

また、ゲーム記録でシュート数とゴール数を追求し、「どこに動いたらシュートを増やせると思う？」「〇〇さんはどうしてたくさんシュートがうてているの？」と問いかけることにより、シュート数（ゴール数）を増やすためにはどのような動きをしたらよいのかを本時の課題と絡め、創造的に生み出していくことができた。

中学校2年生男子（バレーボール）

中学校では、小学校で身に付けたゲームを分析する力を必要に応じて活用していく場であるとして、自ら記録の内容を選択して取り組むことができるようにした。

A男のチームは、得点がなかなかとれないことから、自分たちはどこをねらって得点を取ればよいのかを、ボールの軌跡図を用いた分析を試みた。

2年生（男子） バレーボール A男の反省から
 ゲーム記録から分かったことは、チームの点が決められるのは、B男の後ろということだ。
 だから、後ろの人が前に来てセッターをカバーするようにしていく。

A男は、ゲーム記録によって、相手の特徴をとらえるとともに、自分たちがどんな動きをしていけばよいのかの具体的な方途を見いだすことができた。

(2) 仲間からのアドバイス

仲間からの客観性のあるアドバイスが、プレーヤーの状況判断を助け、動きの高まりを生み出すものとする。以下に示すのは、児童・生徒に身に付けさせたい力を発達段階や運動特性から明確にし、アドバイスの声を対応させて表にしたものの例（表2）である。

1.2 ソフトボールの基本的指導過程

運動時間	できない	→	できる	→	うまくできる	→	力強くできる
運動前	自分の役割からゲームで役割を認識する		ゲームで選手をつらひ、自分の役割に努める		試合を準備してゲームに臨む		
運動中	審判の指示でボールを止める		審判の指示でボールを止める		審判の指示でボールを止める		
運動後	自分の役割を振り返る		自分の役割を振り返る		自分の役割を振り返る		
準備運動	ボールを投げられる		ボールを投げられる		ボールを投げられる		
基本動作	ボールを投げられる		ボールを投げられる		ボールを投げられる		
応用動作	ボールを投げられる		ボールを投げられる		ボールを投げられる		
実践	ボールを投げられる		ボールを投げられる		ボールを投げられる		
振り返り	ボールを投げられる		ボールを投げられる		ボールを投げられる		

指導内容(付きたい力)

付きたい力を引き出すための仲間のアドバイスの声

表2 効果的なアドバイスをするための仕組み（中学校：ソフトボール）

小学校6年生（バスケットボール）

小学校高学年では、瞬時の判断をするための手だてとして、どのチームにもサイドコーチが、「誰に・どのように・どうする」の状況判断の視点でアドバイスをできるようにした。ゲーム中はボールを追うため視野が狭くなる。状況判断の視点をもとにした指示を受ければ、判断に迷いがなくなり、動きの高まりをより引き出せると考えた。

状況判断の視点

- 【誰に】 (例) OOさん! 相手意識
- 【どのように】 (例) ふわっと! 強く! 方法意識
- 【どうする】 (例) つないで! 返して! 目的意識

6年生 ソフトバレーボール C男の反省から
 今日は、「つないで」「返して」の声にこだわって試合をしました。今までは、返せるのに返さないことがあったけど、「返して」と言われたら、強くうって返せたのでよかったです。

漠然とアドバイスをするのではなく、視点を基にしたアドバイスをすることにより、ゲーム記録から見いだした作戦を生かすための個の動きが具体化されたと考える。

中学校2年生男子（ソフトボール）

中学校では、サイドコーチのようなシステムは用いず、課題を達成するためにどんな声をかけるのかを確認し、プレーヤー同士でアドバイスし合えるようにした。ソフトボールの学習では、各チームに所属する野球経験者が軸となり、必要な声をかけ合せてゲームを高めることができた。

中学生が小学生と明らかに違うのは、部活動やクラブによってより専門的にその種目を行っている者が多いということである。つまり、コート（フィールド）内にゲームの状況をつかむことに長けた者がいることによって、小学校のようにサイドからアドバイスをしなくとも、コート（フィールド）内で十分なアドバイス活動ができると考える。

5. 成果と課題

- ゲーム記録によって動きを客観的に見ることができ、自分の動きをとらえてチームの作戦につなげていくことができた。また、ゲーム中の課題意識を高めることにもつながった。
- コート（フィールド）の中で、どう動いてよいか分からない児童・生徒にとって、ゲーム記録を活用してチームで具体的に動きを考えていくことは、ゲームの魅力や特性に触れ、楽しさを味わうために有効な手だてとなった。
- 仲間同士のアドバイスの言葉を具体化し、ゲームで活用する仕組みを作ったことで、瞬時の判断の助けとなり、動きの高まりにつながった。
- ▲動きを客観的にとらえ、技能を向上させる手だてとなるゲーム記録を、発達の段階と対応させながら、さらに追究していく必要がある。
- 動きを効果的に高めるためのゲーム記録を実践から検証し、修正・改善を積み重ねていくようにする。

多治見市教育実践論文 【新人の部】 優秀賞

家庭での実践意欲を高める授業の工夫～確かな知識・技能の習得を目指して～

多治見市立小泉小学校 教諭 白田 恵

1. 主題設定の理由

(1) 今日の課題から

小学校学習指導要領では、「基礎的・基本的な知識及び技能を身に付ける」「家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる」ことなどが強調されている。

よって家庭科では、児童がよりよい生活が送れるようにするために、衣食住に関わる「基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けること」が必要である。

(2) 児童の実態から

5年生までに身に付けるべき力がついていない児童がいることから、家庭と連携しながら、意欲的に取り組める体験を通して技能を確実に身に付けさせていくことが大切であると考えた。

2. 研究仮説

家庭での調査活動や実践的な活動を伴う単元指導計画を工夫して基礎的・基本的な技能を身に付けられる授業内容を工夫すれば、興味・関心を持って技能を身に付けることができ、家庭での意欲的な実践につながっていくのではないかと考えた。

3. 研究内容と実践の具体

(1) 言語活動の充実を図った指導の工夫

<実践例>小題材「洗濯をしてみよう」

言語活動の充実を図るために、家庭で汚れが落ちる工夫を見つけるために比較しながら洗濯に取り組み、自分で考えたことをまとめて発表させた。児童の発表には次のようなものがあった。

A児「干し方について、比べた。しわを伸ばさずに干すと、乾いた後にしわが残ってしまった。だから、しわを伸ばしてから干す必要がある。」

B児「水に浸けておくと、しばらくすると水が少し汚れた。これは洗濯物から出てきた汚れだと思う。だから、水に浸けておくと汚れが落としやすい。」

自分で課題を持って取り組み、それを仲間に伝えることで、理解を深めることができた。

(2) 知的好奇心を引き出す本時の展開の工夫

<実践例>小題材「みそ汁を作ってみよう」

家庭での実践につなげるために、実習だけでなく、「だし」を比較することで児童の知的好奇心を引き出せると考え、みそ汁の旨味の一つである「だし」の必要性に気付かせるための実践を行った。

本時では「かつお節」「にぼし」「昆布」「だしなし」の4種類のみそ汁を準備した。学習プリントには、それぞれの味や見た目、香りなどの違いや特徴を実際に飲み比べながら書けるようにした。一人一人が少しずつ飲みながら活動したため、児童はたいへん意欲的に活動に取り組めた。

4種類を飲み比べて、「だしなし」のみそ汁が一番おいしいと感じた児童はおらず、だしが旨味を引き出すので、みそ汁にはだしが必要であることに体験を伴って理解することができた。

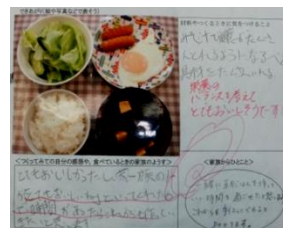
(3) 意欲を高める振り返りの工夫

学校で学んだことを家庭でも実践し、技能を確実に身に付けさせるために、トライカードの実践を行った。また、家庭で実践することで、家族からの励ましの言葉をもらい、児童の自信と喜びにつながると考えた。

C児は、みそ汁と米飯調理の学習の後で、家庭で朝ご飯を作った。初めて母親と一緒に調理をして、家族にも「美味しい。」と言ってもらうことができて、嬉しかったようだ。

その後、この児童の母親が「家族が仕事の日などには、失敗することもあるが、進んでご飯を炊いている。」と話してくれた。

その他の児童も保護者から励ましの言葉をいただき、「またやってみよう。」と思うことができ実践意欲を高めることができたことから、トライカードで実践機会を設けることは、児童の今後の実践意欲につながっていくと言える。



4. 成果と課題

- 家庭での実践について仲間同士で発表し合ったことで、児童の理解がより一層深まった。
- だしについて事前に学習したことで、実習の際にその必要性を十分理解し、丁寧に取り組めた。また、家庭での実践にも繋がった。
- 振り返りを保護者と連携して行うことで、家族のために実践したことに自信をもち、次の実践意欲にも繋がった。
- 表現する力を高めるために、実践や調査結果を図や表でまとめるなど、一層言語活動を充実させたい。
- トライカードの機会を家庭の負担にならない程度増やし、さらなる実践意欲に繋がりたい。

多治見市教育実践論文【新人の部】優秀賞

体を動かすことが好きな子になるために
～のぼり棒を焦点とした、様々な遊びを通しての体力づくり～

愛児幼稚園 坂森 奈緒子

I. 研究主題設定の理由

(1) 「多治見市子どもの健康・体力づくりプラン 実施に向けて」より

「元気タイム」を継続して位置づけている。体を動かすことが大好きになることで、健やかな心と体の育ちを促す。

(2) 子どもの実態より

子ども達の姿や、アンケートから外遊びが嫌いな子がいたり、雲梯や登り棒に苦手意識があったりすることがわかった。‘リズム遊び’はクラス全員の子が‘好き’と答えた。子どもが好きな遊びを取り入れる中で、楽しみながらの体力向上につなげる。

(3) 家庭の実態より

保護者の意識調査で、親子で遊ぶ機会が少ないことがわかった。親子で体を動かす心地良さを味わえる働きかけをして、保護者へ健康な体作りと運動への意識を高める。

II. 研究仮説

体全体を使う遊びを工夫して取り入れ、楽しみながら登り棒に必要な力をつける。保護者へ、生活習慣の向上、運動意識が高まるよう啓発し、親子で体力向上に励み、体を動かす楽しさを味わうことができる。

III. 研究内容と実践

1. リズム遊びを活用した取り組み

(1) 主体的な遊びに繋がる環境の工夫

①なりきって遊ぶ環境作り（声の掛け方の工夫・実際の写真を見せる）

②異年齢での取り組み

(2) リズム遊びを通して理解できる身体の発達・弱さ

リズム名	目的	育ちの弱さの表れ方
かめ	柔軟性を育て、背筋力や腹筋力がつく。	体が硬く反りができない。体を反らせた状態であることが困難。

2. サーキット遊びを活用した取り組み

サーキット遊びや、手押し車、雑巾掛けや机運び等を生活や遊びの中で取り入れていくことで、登り棒に必要な力もつける。

3. 子ども達の自信に繋げる援助

(1) 友達の良い姿を認める場の設定

‘誰のどんところがよかったか’を話す場を作る。保育者だけでなく、‘友達にほめられた、認められた’という経験が大きな自信になる。

(2) 友達とのペア活動を通して

リズム遊びでは、きっかけ作りとして意図的なペア作りをする。ペアで気持ちや動きを合わせるもの、一緒に楽しさを味わえる遊びを取り入れる。

(3) 一人一人に合わせた指導・援助

足腰の弱さがみられるA男と、自分に自信がないB男に対する指導・援助を考える。

4. 家庭への啓発

(1) アンケートの実施

(2) クラス便りの工夫・活用

(3) 親子で取り組めるカードの活用

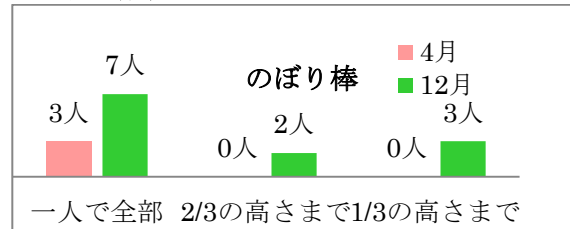
(4) 参観日の活用

IV. 研究の成果と課題

1. 子どもの意識・姿から

<外遊びは好きか？>の質問では‘外で遊ぶことが嫌い’と答えた子が、いなくなった。

2. 子供の成長から



3. 研究内容から

(1) リズム遊びを活用した取り組みから

- ‘なりきれるよう’工夫することで、より意欲的に、動きを意識しながら体を動かすようになった。
- リズム遊びの動きから、発達や育ちの弱さを明確にすることができた。

(2) サーキット遊びを活用した取り組みから

- 様々な動きを組み合わせることで、楽しみながら、体力向上に結び付けることができる。
- スモールステップで認めていき、次への意欲につなげていくことが大切である。

●更に多様な動きを取り入れ、運動量を増やす。

(3) 子ども達の自信に繋げる援助から

- 友達とのペア活動を通して、気持ちや体の動きを合わせる楽しさを味わい、関係が深まった。
- 子供の成長を捉え、具体的に認め褒めたことや、友達に認められた経験が、一人一人の自己肯定感や自信につながった。

●常に一人一人を意識して見ることで、子どもを認め、更に伸ばせるよう努める。

(4) 家庭への啓発から

- 通信や元気カードを通して、親さんの運動意識に対する高まりがあった。

- 親子で取り組めるカードを通して、親さんの運動意識の向上だけでなく、子どもの意欲の高まりや、また親子でのふれあいの一助にもなった。

●今後も、更に外遊びをしたり、親子で一緒に運動を楽しんだりできるよう、工夫や啓発をしていきたい。

研究報告会の様子から

平成26年度の教育実践論文入賞者による研究報告会が、2月16日（月）、バロー文化ホール大会議室において行いました。



小泉小学校の柴山先生は特別研修員の立場から報告をしていただきました。道徳の授業を通して、自分や仲間のことを大切にでき、誰にも居場所がある温かい学級・学校づくりに向かう取組について報告されました。

愛児幼稚園の坂森先生は、多治見市の施策の「いきいき遊び」を受け、家庭にも積極的に働きかけ、「体を動かすことが好きな子ども」の育成について報告されました。

小泉小学校の白田先生は、子どもたちが将来、豊かに生きていくために、家庭科で今、何をこそ身に付けさせなければならないかをはっきりさせ、取り組んだ実践を報告されました。

平和中学校の古川先生は、小学校から中学校にかけて、長期に渡った実践の蓄積を整理し、体育・保健体育の学習で発達段階を的確に捉えたねらいの設定や指導の工夫の大切さについて、具体的に報告されました。

実践論文を執筆することは、たいへんです。しかし、実践したことを文章にまとめ直すことで、客観的に自分自身の実践を反省することができます。日々の授業で実践し、反省し、授業改善につなげる。この積み重ねが、教師としての軸を、よりしっかりとしたものに鍛え上げるのだということ、感じ取ることができました。

第3回・第4回の市初任者研修を行いました

【第3回 市初任者研修】

日 時 平成26年12月16日（火）

研修内容

- ① 生徒指導研修：教育相談室
- ② 人権研修：くらし人権課
- ③ 接遇研修：市民課
- ④ 情報教育研修：教育研究所

生徒指導研修では、児童生徒に身に付けたい力である「自己指導能力」の育成について学びました。教師は、児童生徒に付き、良い事実をつくり、それを認め、価値づけることが大切です。また、学校課題は組織的に解決していかなければなりません。「こんな時はどう対応したらよいか・・・」と、事例を挙げながら、みんなで考えました。

人権研修では、「多治見市子どもの権利条例」についての講話を聞きました。11月20日は「たじみ子どもの権利の日」です。多治見市が子どもの人権について早くから取り組んでいることを知り、子どもの人権を保障するとはどういうことか、学校での具体的な姿をグループで交流しました。



接遇研修は、市民課の方を講師に「知っておくと重宝するビジネスマナーの基本」を学びました。学校の職員一人一人は、その学校の顔となります。電話対応や挨拶、名刺の出し方等、基本的なマナーについて学んだり、お茶の出し方は実際

にやってみたりしました。接遇とは、相手の立場に立ち、相手の気持ちを想像して行動することです。これは、人と接する仕事をしている私たちが常に大事にしたいことです。

情報教育研修では、タブレット端末の活用方法を考えました。情報器機を効果的に使うために、教材づくりに取り組みました。

今回の研修で学んだことを、ぜひ学校で実践していただきたいです。

【第4回 市初任者研修】

日 時 平成27年1月13日（火）

研修内容

- ① 救急救命講習
- ② 家庭・地域との連携について
- ③ 多治見市の特別支援教育について
- ④ 副教育長講話



救急救命講習では、胸部圧迫、人工呼吸、止血、応急手当など、救急時の対応方法について学びました。もし、自分がその場に出くわしたとき、慌てず落ち着いて対処できるようにと、真剣に講習に取り組みました。

家庭・地域との連携については、多治見市PTA連合会の役員の方のお話を聞きました。学校で児童生徒に指導をする中で、保護者の皆さんの協力や理解を得ることの大切さを、保護者の立場から話をさせていただきました。私たち教師は、多くの保護者や地域の皆さんに支えられて、日々の指導に当たっているということを忘れないように、取り組まねばなりません。

多治見市の特別支援教育については、特別な支援を要する児童生徒が増えつつある現状から、

これからの指導法の在り方について研修しました。個のニーズを捉え、ICTを効果的に活用するなど、多様な指導方法を研修することの大切さを学びました。

副教育長講話からは、学級経営の在り方を切り口として、目の前の児童生徒と、真摯に向き合うことの大切さを学びました。日々の授業や学級経営をきちんと振り返り、指導方法を工夫したり、改善したりすることは教師の使命です。これからの教員人生の中で、教師としての在り方や指導観をしっかりともてるようになっていくことが必要です。

この4回目の研修が、多治見市教育委員会が主催する初任研は、今年度最後となりました。研修に向かう初任者の先生の姿から、この1年間で、随分たくましく成長されたことを感じる事ができました。

まもなく新しい年度を迎えます。今後も研修を積み重ね、しっかりした指導力のある教師へと、更に成長されることを期待しています。

第51回土と版画展の様子から

今年度、土と版画展は51回目を迎えました。今年も、幼・保・小・中、合計3000点を超える作品が出品されました。

多治見の文化を学び、表現するこの展覧会を、これからも盛り上げていただきますよう、お願いします。



シリーズ連載

S S W (スクールソーシャルワーカー) の仕事 ④

これまで「SSW」とはどういう職種で、どんな活動をしているのか説明をしてきました。

児童生徒を取り巻く生活環境には様々な問題があり、子ども自身では改善が難しい事がたくさんあります。その結果、学習に十分取り組めない、学校を休みがちになる、といった問題につながっている現状が多くあります。

スクールソーシャルワーカーはそうした問題を少しでも解決するために、学校、保護者、関係機関と連携して子どもの環境改善に取り組んでおり、学校からのニーズも年々高まっています。今後もSSWが効果的に活動を進めていくために、関係者が注意すべき点を整理しておきます。

(1) 業務の遂行について

多治見市のスクールソーシャルワーカーは、市教育委員会が任命し、教育相談室長の服務監督のもと、派遣された小中学校長の指示を受け、業務を行います。

業務の遂行に際しては、「教育基本法」等の各種の学校に関する法律の遵守とともに、「地方公務員法」を守りつつ業務を遂行します。

(2) 守秘義務と情報共有について

スクールソーシャルワーカーの活動に当たっては、岐阜県の個人情報保護条例を遵守します。

また、個別の面談や家庭訪問等により得た情報や児童生徒や保護者に支援・指示した内容については、必要に応じて派遣された小中学校長に報告します。

また、個人情報のやり取りについては、電子メールやFAXでのやり取りは原則禁止です。

(3) 外部機関との連携について

外部機関との連携を図る場合には、外部の専門性を理解した上で、適切に行います。その際には、スクールソーシャルワーカーが自己判断で外部との連絡を取ることは避け、派遣先の小中学校長の指示のもとで行います。

(4) 家庭訪問における留意点

児童生徒への対応として、家庭訪問を行う場合には、学校と連携し、保護者の理解を得た上で行います。その際、SSWが単独で訪問をすることは避け、学校職員と一緒に家庭訪問をするようにします。

(5) 文書などの事務処理について

ケース会議の記録や各種統計資料、また、必要に応じて発出する文書がある場合は、市教育委員会又は派遣先の小中学校長の許可を得て行います。

(6) 文書の送付について

電子メール等での文書送信については、個人情報が含まれていないか十分留意します。勤務実績簿等については、市教育委員会へ提出する際に派遣された小中学校長に提出します。

